

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の a～d の各文中の——線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの 1～4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|----------------------|-----------|---|-------|---|------|---|------|
| a | 相手の <u>土俵</u> で勝負する。 | (1) つちひょう | 2 | つちだわら | 3 | どひょう | 4 | どだわら |
| b | 早急に <u>善処</u> する。 | (1) ぜんしょ | 2 | ぜんいつ | 3 | よいしょ | 4 | せんちよ |
| c | 皮肉な <u>結末</u> を迎える。 | (1) かわにく | 2 | ひにく | 3 | びにく | 4 | びんにく |
| d | チームを <u>率</u> いる。 | (1) おち | 2 | おち | 3 | むく | 4 | ひき |

(イ) 次の a～d の各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの 1～4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- a 国際連合にカメイする。
- 1 おどろいてヒメイをあげる。 2 巨大なメイロで遊ぶ。
- 3 他国とドウメイを結ぶ。 4 矢が的にメイチュウする。
- b 商品をジュリヨウする。
- 1 リヨウコウな人間関係。 2 ホンリヨウを發揮する。
- 3 リヨウシが海に出る。 4 荷物のジュウリヨウを測る。
- c 集まった人たちをタイサンさせる。
- 1 足首にホウタイを巻く。 2 畑の害虫をタイジする。
- 3 タイレツを組んで行進する。 4 現代をブタイにした物語。
- d 都市開発で街がサカえる。
- 1 強いセイリヨクの嵐が近づく。 2 病院でセイミツ検査を受ける。
- 3 上司のエイダンを仰ぐ。 4 連続優勝のエイコウに輝く。

(ウ) 次の例文中の——をつけた部分の意味として最も適するものを、あとの 1～4 の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文 野球とサッカーのどちらもやりたいと欲ばった結果、みごとにあぶはち取らずになった。

- 1 片方に偏ってしまうということ。
- 2 片方から悪く思われるということ。
- 3 どちらでもよい成果を得ると言うこと。
- 4 どちらもうまくやれないということ。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

もうすぐ小学六年生になる「大田川^{おおたがわ}^え」、^{はらさわ}「原沢利斗」、^{もとむらな}「本村直」の三人は学校のクラブ活動でクイズ研究会に入っている。しかし、「直」は研究会をやめると言いだす。

「本当はこんなこと言いたくないけど、しつこく聞くから言うよ。あくまでもしかたなく言うんだからな。」直は前置きして続けた。

「大田川さんは、ぎゃーぎゃーうるさい。そしてすぐパニックになる。いっしょにやってみてつかれる。」
「うっ。」

しかたなくのわりには、ぐうの音も出ないようなことで、^あ「直」はうめいた。それきり言葉を失った^あ「直」のかわりに、いっしょにいた原沢利斗が直にたずねた。

「本村くん、やめてどうするの？」
すると直は、「よくぞ聞いてくれました。」とばかりに声をあげた。

「1 eスポーツやることにした。^{たかはし}高橋からさそわれてちよつとやったら、めちやくちやおもしろかった。eスポーツならクイズも^{ぼうけん}冒険もバトルも野菜の栽培^{さいばい}だってできるし、店だって開ける。とにかくなんだってできるからね。」

「確かにクイズ研究会は、クイズしかできないね。」

「そういうこと。eスポーツの方がずっといける。」

利斗が納得すると、直は大きくうなずいた。

「もし盛りあがったら、先生に相談して、正式なクラブ活動にしてみよう予定。」

「いいなあ。ぼくもやろうかな。」

「ちよつと、りっくん！」

つられそうになった利斗に、^あ「直」は非難の声をあげたが、直は首をかしげた。

「原沢くんは、本番に弱いから試合には向いてないと思う。てことで、今からさっそく練習だから。」

直は言いにくそうに言いのこして、小走りでマンションを出ていった。

「……。」

しばらくぼうぜんとしていた^あ「直」は、やっと声をしぼりだした。

「うっそお。」

「どうやら本当みただね。」

利斗がつぶやく。

「言いたい放題言われたね。」

「しかたないんじゃない？ 全部本当なんだから。」

利斗は首をすくめたあと、落ちついた声で言った。

「本村くんの言うことは理解できるよ。eスポーツならいろんな要素のゲーム^{せんたく}を選択できるし、^{しげき}刺激もあるし派手。」

2 ちらつとテーブルの上に目を流す。そこには、クイズの問題集とノートと筆記用具が置いてあった。とても派手とは言いにくい風景だ。

「そして、さっちゃんを取りみだしがちだし、ぼくはビビリ。それが原因で勝てないんだからつまらないんだと思う。」

保育園のころからのつきあいなので、冴と利斗は、おたがいのことを、「さっちゃん」「りつくん」と呼びあっている。

「だからって、クイズ研をやめるなんて、本村くんのクイズ愛はその程度だったの？」

「じゃない？」

息まく冴に、利斗は遠くを見るような目をして言った。

「だいたい本村くんは、そんなにクイズ好きではなかった気がする。さっちゃんに無理やり引っぱりこまれた感じだった。」

利斗は直が入会したときのことを、思いだしているようだったけれど、確かにそうだったと冴も思いあたる。

小学校にクイズ研究会ができたのは、去年の春のことだった。

冴の住む市では年に二度、小学校対抗のクラブ活動の大会がある。陸上競技や球技、水泳などのスポーツのほか、放送部のアナウンス大会や、ディベート部の討論大会もある。そこにクイズ大会が加わったので、冴たちの小学校にもクラブが新設されたのだ。大会は、三人一組でチームを組み、トーナメント方式で対戦するというもの。

「今年からクイズのクラブができる予定ですので、興味がある人は説明会に行ってください。」

3 去年の四月、クラブ決めのとくに先生が言ったので、冴は、はりきって行ってみた。小さなころからクイズやなぞが大好きだったからだ。そこにやってきた原沢利斗を見て、冴はにかつと笑った。利斗もクイズ好きで、保育園ではクイズ王の座を争ったほどの間柄だったからだ。これなら期待できると喜んだのだけど、それきりだれも来なかった。

「二人じゃクラブにはならないね。最低三人ないと試合に出られない。」

と、担当の先生がつぶやいたところに、ひよいと一人の男子が顔をのぞかせた。それが直だ。新しいクラブができたと聞いて、ちよつとのぞいてみただけらしかったが、チャンスとばかりに冴が引っぱりこんだのだった。

それきり入部希望者はあらわれず、クイズ研究会は三人で活動することになった。大田川冴、原沢利斗、本村直のいずれも五年生。

それからほぼ一年間。三人は、週一度の学校でのクラブ活動の時間とは別に、冴と利斗が住んでいる、サンパワーマンション一階のサロンで勉強をすることにした。

サロンは、一階のエントランスからエレベーターホールまでの間にある大きなフロアだ。三人がけと二人がけのソファセットが三つずつに、一人がけの籐椅子セットが三つあって、話しあいには持つてこいの場所だ。ちなみに壁には、造りつけのパソコン用デスクがあるので、仕事や調べ物をする人もいる。

マンションは直の家からも近いので、放課後の夕方までやっても、帰りの心配がなかった。

そのかいあって、夏の大会では二回戦を突破し、秋の大会ではベスト8に入るといふ好成績を達成した。思わぬ快進撃ではあったが、同時にとてもくやしかった。

というのも、そのときに負けた相手が優勝したからだ。しかも、対戦成績はたった一点差の大接戦。もし、勝っていたらと考えたら、冴の胸の内はふつふつと燃えるようだった。

ちなみにその相手は「チームエコル」という、市内では唯一の私立小学校の三人組。だから、「チームスリー」にとって「チームエコル」は最大のライバルなのだ。

大会のあと、三人はそのことを確認しあった。そして、

「この調子で卒業までに優勝するぞ！」

「打倒、『チームエコル』。」

「おー。」
と、みんなであわせた手をつきあげた。それがわずか三か月前のことだ。それなのに、直はやめてしま
うなんて。

ことの始まりから冴が思いだしていると、ぼつんと利斗がたずねた。

「どうするc。」

「どうするって。」

「二人じゃ試合に出られないよね。」

確かめる利斗の目は、小刻みに泳いでいた。

冴はとつきに一步足をふみだした。⁴間接照明でできたうつすらとした利斗の影を、むんずとばかりに

ふみつける。

「りっくんのクイズ愛は本物だよね。」

冴は利斗につめよった。

二人は同じ階に住んでいる幼なじみ同士だ。だから利斗のクイズ好きを冴はよく知っている。保育園も
同じだった二人は、先生が出してくれるクイズやなぞなぞが大好きで、いつも競いあって答えていた。

「う、うん。」

利斗が目を泳がせながらもうなずいたので、冴もきっぱりとうなずいた。

「じゃあもう一人入ってもらおう。」

自分たちのクイズ愛のために、クラブを消滅しょうめつさせるわけにはいかない。

⁵利斗はしばらくなにやら考えていたが、やがて気楽な感じで言った。

「そうだね。まあ新学期になったら、だれかが入ってくれるかもね。」

「そんなのんきな。」

冴は思わずもう一步ふみだした。

「新学期なんておそいよ。すぐに探さなきゃ。だいたいクラブ説明会にだれも来ないかもしれないじゃな
い。去年も私たちのほかは本村くんだけだったんだし。」

すると利斗は、はっとしたような顔をした。

「あつ、それはそうかも。eスポーツのクラブができればやばいよね。」

オーマイガーツ！

冴は口をオーの字にして、両手でほっぺたをおさえ、声を出さずにさげんだ。

そしてそののち、

「春休みに入る前になんとかしなくっちゃ。」

『^注ムンクの叫び』のポーズのまま声をあげた。

(まはら 三桃「クイズ研究会チームスリー」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) ムンクの叫びⅡノルウェーの画家ムンクの、両手で耳を覆って恐怖の表情を見せている人の絵。

(ア) ——線1「eスポーツやることにした。」とあるが、ここでの「直」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 クイズ研究会をやめる理由が「冴」にあると言ったことを後悔していたので、「利斗」が質問してくれたおかげで言い直すことができるという安堵の気持ちを込めて、しっかりと落ち着いた声で読む。
- 2 自分からはあまり言い出しにくいことだったために黙っていたが、eスポーツの魅力語りたくて本当はずうずうしていたので「利斗」の質問を喜んだことがわかるように、張りのある声で読む。
- 3 親しい仲間に別れを告げるのはつらいことだが、「利斗」が理由を聞いてくれたおかげで、自分の決意をしっかりと伝える覚悟が決まったことを示すように、相手をまっすぐに見つめて真剣な声で読む。
- 4 自分の考えを理解してくれない相手に何度も同じことを説明しなければならぬことにうんざりしており、もうこれ以上聞き返されたくないという拒絶のニュアンスを含めて、冷たく強い口調で読む。

(イ) ——線2「ちらつとテーブルの上に目を流す。」とあるが、そのときの「利斗」と「冴」を説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「直」がeスポーツについて語るのを聞き、自分たちがこれまで積み重ねてきた地道なクイズの勉強の様子と比べたら、確かにクイズ研究会は地味と思われるのかもしれないと感じている。
- 2 使い込まれた問題集やノートを見て、eスポーツに夢中になっている「直」に自分たちのクイズに対する情熱が負けてはいないことを確認し、これまでの努力の成果が誇らしくなっている。
- 3 eスポーツに興味をわいてきたものの、目の前にあるクイズの道具を見ると、これまで一緒に頑張ってきた思い出がよみがえり、簡単にやめるわけにはいかないと気持ちを奮い立たせている。
- 4 これから自分たち二人だけでどのように活動していけばよいかという不安が押し寄せ、テーブルの上の問題集を見ても、これから先の計画がまったく思い浮かばずに、途方に暮れている。

(ウ) ——線3「去年の四月、クラブ決めるときに先生が言ったので、冴は、はりきって行ってみた。」とあるが、そのときの「冴」を説明したものと最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 クイズやなぞなどが大好きで、新しくできるクイズのクラブで活動できることに大きな期待を持ち、説明会に参加することを心から楽しみにしている。
- 2 新しいクラブができると聞いて興味を持ったが、どんな内容なのかよくわからないので、とりあえず説明会に行ってみようかと考えている。
- 3 クイズのクラブに入ることで、学校での自分の評価が上がり、友だちが増えるのではないかと期待して、積極的に説明会に参加しようとしている。
- 4 保育園時代からのライバルである利斗がクイズのクラブに入ると予想して、彼に負けないように自分も入らなければならないと決意している。

(エ) —線4「間接照明でできたうつつすらとした利斗の影を、むんずとばかりにふみつける。」とあるが、

そのときの「冴」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「直」がやめてしまった衝撃と、「利斗」まで弱気なことを言い出したことへの怒りを抑えきれず、代わりに「利斗」の影をふんでいら立ちを発散しようとしている。

2 「利斗」は自分の気持ちを察してくれていると信じていたのに、期待外れの反応をされたため、影をふむという衝動的な行動に出て「利斗」の注意を引こうとしている。

3 クラブの存続が危ぶまれる深刻な状況の中で「利斗」が泣きだしそうになっていると知り、自分はこのように元気だと態度で示しながら、優しく励まそうとしている。

4 試合に出られないという「利斗」の不安を感じ、その弱気な心を足で押さえつけるようなイメージで、二人でいっしょにクラブを存続させようと必死になっている。

(オ) —線5「利斗はしばらくにならやら考えていたが、やがて気楽な感じで言った。」とあるが、そのときの「利斗」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「直」が抜けた穴を埋めるのは簡単ではないとわかっているが、落ち込んでいる「冴」を励ますためには明るい見通しを語るしかないと考え、心配していないふりをして元気づけようとしている。

2 「冴」の剣幕に押されたが、本心では自分もクラブをやめたいと思っており、適当に話を合わせてその場をやり過ごして、新学期になって「冴」がクラブをあきらめるのを待とうと計算している。

3 自分たちのクラブには魅力があることを信じているため、今は部員が減ってしまったとしても、新学期になって新入生が入ってくれば、自然とクイズ好きの仲間が集まってくるはずだと楽観視している。

4 クラブが存続できるかどうかの危機という重大な事態に直面しても、「冴」のようにあわてたり必死になつたりはせず、先のことはそのときになればなんとかなるだろうとマイペースで考えている。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 突然クラブをやめた「直」に対して「冴」と「利斗」が怒り悲しむ様子が、直接的な言葉ではなく、視線の動きや沈黙、動作の細やかな描写を通して、深刻で重苦しい雰囲気の中で描かれている。

2 クラブ活動における人間関係の難しさや、困難を乗り越えて未来へ向かって進んでいこうとする「冴」と「利斗」の様子が、「冴」と「利斗」、そして「直」の視点を切り換えながら描かれている。

3 「直」がクイズ研究会をやめると言い出したことに対する「冴」の驚きや戸惑い、そして「利斗」を引っ張ってクラブを存続させようとする決意が、「冴」の回想を交えながら描かれている。

4 クラブ活動をあきらめかけていた「冴」と「利斗」が、ライバルとの再戦という目標を見つけ、再び前向きな気持ちを取り戻す様子が、会話文のテンポのよいやり取りによって描かれている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

さて、横浜よこはまの自宅にもどってきて、(注) サンクト・ペテルブルクでの決心を実行しようとする、たちまち私は大混乱におちいった。いったい、どの本を捨てればいいというのか。

一冊ずつとりあげて、ページをめくってみる。いや、この本はとっておくべきだ。とても捨てるわけにはいかない。それでは、こちらの本はどうか。それも捨てられない。

日曜日の午後をまるまるあけて、**I** なんとか **a** 本を **b** 捨てようと **c** 決心して **d** 作業にかかったのだが、結局、その日は何の成果もあげることなく終おわってしまった。それでもやはり私は、人間にとって大事な本は三冊ぐらいではなからうかと思っていた。その他の本は必要ない。なんとかして大胆だいたんに捨てるべきだ。本を読むことをはじめめる前に、まず本を捨てることからはじめなければならぬ。

A、本を捨てるということは、ほとんど不可能に近い作業だとすぐにわかった。まして究極の三冊を選びだすことなど、絶望的である。

そのとき、以前ある雑誌で読んだ(注) 石堂淑朗いしどうしゅうろうさんの言葉が、ふと頭の中によりみがえった。今、正確な文章は手もとにないが、たしか、石堂さんがそこで言われていたのは、こういう意味のことだったと思う。

つまり、本を捨てようと思うなら、まず(注) ドストエフスキーは残す。ドストエフスキー自身が書いた作品は残している。だが、ドストエフスキーについて書かれた本は、捨てる。

たぶん、そういう意味のことを、もつとちがう表現でいっておられたと思うのだが、それを読んだとき私は、天の啓示けいじを得たような気がしたものだ。

『罪ばつと罰』は残す。だが『罪と罰』について書かれた本は捨てる。これはずいぶん勇気の要ることだ。しかし、これは確かに一つの見識ではある。それくらいの決意がなければ、私たちに本を捨てることなどできるわけではない。

とりあえず私は、捨てる捨てないは別として、本棚ほんだなの中を二つのブロックに分ける作業にとりかかった。ところが驚おどろいたことに、ドストエフスキーの著作よりも、それについて書かれた本の方が圧倒的に多いことに気づいて愕然がくぜんとしたのだ。

(注) モーツァルトについて書かれた本や、(注) ゴッホについての本や、(注) 本居宣長もとのおのりながについての本などは、いったいどうすればいいのか。原則にしたがって捨てるか、それとも――。

(中略)

雑誌で読んだ石堂淑朗さんの名言に、これだ、と膝ひざをたたいたものの、**1** 名言ほど行ぎょうに難しいものはない。その日いちにち、結局、私はなすこともなく終ってしまったのだ。

この本を読んでおられる読者のかたも、ために日曜の一日、究極の三冊を残すために蔵書の整理をされてみるといい。実際に捨てなくとも、三冊を選びだすというその作業に挑戦ちようせんしてみられるだけでも、きつと得るところが大きいような気がする。

この本は捨てる、この本は残す。そんなふうにして、ぎりぎりのところで残した三冊、ひよっとしたら、それが今の私たち自身の本質を最もよく表現しているかもしれないのだ。

私たちは、本にかこまれて暮くしている。しかし、本当に必要なのは、たくさん本を次つぎと読み、それを本棚に並べておくことだろうか。

本を読むのはいい。読むのはいいが、その本を、わざわざ保存しておく必要はない。最近、私はそう思うようになった。**2** 一冊の本を読んで、いやでも頭の中に残る一行があれば、それで充分なのだ。忘れてしまうような内容は、もともと縁えんがなかったのだと諦あきらめる。

一冊の本の中の一行が頭に残るのは、なにげなく読んだ言葉が、錐きりをもむようにこちらの魂たましいに突き刺さってくるときである。そういう言葉は、忘れようとしても忘れられるものではない。赤線を引いたり、

メモをとったり、いろんなことをしても忘れるものは忘れる。そういうものだ。それは、ひよっとして本当は必要がないものだったのかもしれない。

本当に大事なことは、どんなに忘れようと頑張っても頭にこびりつく。(注) おんぶお化けのようにこちらにしがみついて離れないものなのだ。そういうものにこそ価値がある、というふうには私は思う。

もつとも、山のような蔵書に埋もれて暮すのも、三冊の本だけを枕もとに置いて生きるのも、それはその人の勝手である。どちらがいいというわけではない。だが一度、この本を残すか、捨てるか、と、迷ってみることは決して悪いことではなさそうだ。

いまも私は、相変わらず捨てることのできない本の山の中に、II 身を狭くして暮している。そもそも、本を捨てるということ自体が、なにか罪悪感をおぼえずにはいられない世代であるらしい。

私が子供のころ、読みさしの本のページを折ったりすると、父親からいきなり頭を殴られたものである。本をまたいで歩いたりすると、母親は、ため息をついて、

「本をまたぐなんて——」

と、首をふったものだった。しかし、本は道具である。本を愛し、本に熱中するのは優雅な趣味だが、本は決してそれだけのものではない。

私は新幹線に乗るとき、よく駅の書店で新書を一冊買う。週刊誌では、名古屋までもたないからだ。静岡あたりですぐに終わってしまう。大阪まで三時間たらずの移動には、新書一冊がちょうど手ごろなボリュームである。B 読み終えた本は、座席に残して降りる。きつと誰かがまた読んでくれるにちがいない。しかし、その本がまた気になって、同じ本を二冊も三冊も買うことがあつて苦笑するときもある。それでも、今はその本を本棚にとつておこうとは思わない。

(五木 寛之「知の休日」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) サンクト・ペテルブルクIIロシアの都市。 石堂淑朗II脚本家。

ドストエフスキーIIロシアの小説家。『罪と罰』などを書いた。

モーツァルトIIオーストリアの作曲家。 ゴッホIIオランダの画家。

本居宣長II江戸時代の言語学者。

おんぶお化けII背中におぶさつてきて離れないお化け。

(ア) 本文中の A・B に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 A ところが B だから 2 A たとえば B それから

3 A しかし B そして 4 A そして B けれども

(イ) 本文中のくく線 I 「なんとか」は、本文中の aくd のどの部分にかかっているか。次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 a 本を

2 b 捨てようと

3 c 決心して

4 d 作業にかかったのだが

(ウ) 本文中の II に入れる語として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 頭 2 首 3 胸 4 肩

(エ) ——線1「名言ほど行うに難しいものはない。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 本を割り切つて整理するにはよいが、ドストエフスキーの著作などは、それについて書かれた解説書がなければ内容を理解することが不可能だと知ったから。
- 2 本を整理するために役立つ名言だが、本を捨てるという行為自体が、本を大切にするという価値観に反しており、実際に本を捨てることはできなかったから。

3 「著者の作品を残し、解説書を捨てる」という基準は明快だが、実際には解説書の方が数が多く、著者本人の執筆でなくとも捨てがたい本も存在するから。

- 4 石堂淑朗氏の言葉はすばらしいが、実際に蔵書を二つのブロックに分けてみると、ドストエフスキーの著作そのものが予想以上に少ないことに気づいたから。

(オ) ——線2「二冊の本を読んで、いやでも頭の中に残る一行があれば、それで充分なのだ。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 一冊の本を熟読して得られる一行の重みの方が、知識を蓄積しようと次々に読んで本棚に並べた何百冊もの蔵書よりも知的な満足度が高いものだから。

2 忘れるような内容はもともと縁がなかったものと諦めることで、新幹線で読み終えた本を持ち帰らずに座席に残すような自由な読書が可能になるから。

- 3 本はあくまでも思考の道具なので、内容の大部分を忘れたとしても、自分を支える柱となる一行さえ見つければ読書の目的は達成されたと言えるから。

4 魂に突き刺さるような言葉は自然と頭にこびりついて離れず、そのような忘れられない一行こそが、その人にとって真に価値のある情報だと言えるから。

(カ) ——線3「この本を残すか、捨てるか、と、迷ってみる」とあるが、その意義を筆者がどのようなことと考えているかの説明として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 本を取捨選択する過程を通じて、自分にとって本当に必要なものが何であるかを見つめ直す機会になるということ。

2 蔵書を整理することによって、これまで読んできた本の内容をふり返り、知識を体系的に整理できるとのこと。

3 本を捨てる決断をすることで、物に執着しない精神的な自由を獲得し、より豊かな生活を送れるようになるということ。

- 4 究極の三冊を選び出す作業を通じて、読書の質を高め、今後どのような本を読むべきかの指針を得られるということ。

(キ) 著者は、本文を通して「本を読むこと」とはどのような行為だと考えているか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 知識を蓄積していく行為であり、読んだ本を保存しておくことでいつでも必要な情報を取り出せる状態にしておくべきものである。

2 心に深く刻まれる言葉との出会いを求める行為であり、本そのものを所有することよりも、内容が記憶に残ることに価値があるものである。

3 自己を形成していく過程であり、厳選した少数の本を繰り返し読むことで思想や人格を深めていくべき行為である。

- 4 文化的な教養を身につける手段であり、多くの本に触れて幅広い知識を獲得することが重要な意味を持つ行為である。

- (ク) 本文について説明したものととして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。
- 1 本を捨てるという自らの試行錯誤しこうさくごをもとに、他者の基準を借りても解決することができない蔵書整理の難しさを描きつつ、本に関する自らの考えを示していくことで、本との向き合い方を論じている。
 - 2 蔵書を整理できない世代特有の悩みなやみを述べ、他者の合理的な選別法を引用して、本を読み捨てにする現代の読書スタイルの有効性を強調することで、本に関する古い価値観からの脱却だつぎやくを論じている。
 - 3 究極の三冊を選ぶ作業の意味を示し、古典と解説書のどちらを優先すべきなのかという問題を論理的に整理した上で、親の持つ感覚が現代の読書観あたに与えている影響えいきやうについて批判的に論じている。
 - 4 自宅での実体験を交えつつ、本を愛することと捨てることの矛盾むじゆんを指摘してきし、本の内容を忘れないための具体的なメモ術や読書法を提案して、読者が効果的に知識を吸収するための指針を論じている。

【文章 1】

問四 中学生のKさんは、失敗や誤りを避けられるように注意することが最も大切だと考えているが、他の視点からの考え方も知りたいと思つて資料を調べ、二つの文章に着目した。次の【文章1】、【文章2】は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

大切なのは、失敗と上手に付き合う方法を見つけることです。

人は、生きていくかぎり、必ずいくつかは失敗しますし、事故を起こすこともあるでしょう。あり得ることは起こります。どうしても起きてしまう「失敗」との付き合い方が上手なひとは、新しいことに果敢にチャレンジして、大きく飛躍するチャンスをつかむことができます。たとえそのチャレンジで失敗したとしても、数々の失敗と上手に付き合いながら積み重ねてきた体験的知識を生かして、どんな挫折も乗り越え、さらに成長して、次のチャンスに備えることができます。

逆に失敗との付き合い方が下手なひとは、失敗するかもしれないリスクをひたすら避けるので、同時に成功するチャンスも逃してしまいます。また失敗した経験からしか学べない体験的知識も身につけられないため、取り返しのつかない失敗が起る可能性を低くもできず、実際に大きな失敗が起きてしまったときには、回復する方法もわからず、大きなダメージを受けることになります。

(畑村 洋太郎「やらかした時にどうするか」から。一部表記を改めたところがある。)

【文章 2】

偉い科学者というものは、正しいことの何倍も、誤ったことを言っている。正しいか誤ってるか、まだはつきりしないままに、いろいろと議論したので、その正しいことだけが今に残ったのである。誤りを言う人がいなかったら、学問なんて進まなかったろう。

いまでも、数学者の討論会などでは、みんなが思いつきを言うものだから、誤った意見がいっぱい出る。とくに、優秀な人ほど、よく誤ったことを言うようだ。平気で誤ったことが言えるほどに、その人に自信があるのだろう。誤るのがこわいというのは、自分に自信がないことでもある。

「正しい意見は堂々と言いましょう」というのは、おかしなことだと思う。「正しい」とわかりきっていることなら、わざわざ意見をのべて討論するほどのこともない。正しいかどうか、あやしい意見のべてこそ、討論に値するのだ。そして、文化的創造といったものは、そうしたことからしか生まれぬ。「正しい」ことがきまっています、おもしろくもない。

たとえ誤った意見を言つて失敗したとしても、その経験が次の考えや新しい発想につながる。だから失敗をおそれても言わないより、思いついたことを発言することが大切なのである。

(森 毅「まちがったっていいじゃないか」から。一部表記を改めたところがある。)

【Kさんのメモ】

(ア) Kさんは事前に自分の考えを書いた上で、【文章1】と【文章2】を読み、内容を次のようにまとめた。【Kさんのメモ】中の I・II に入れる語句の組み合わせとして最も適するものを、あとの1〜4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

自分の考え

失敗や誤りを避けられるように注意することが最も大切だ。

本当にそうだろうか？

【文章1】 ……大切なのは、失敗と上手に付き合う方法を見つけること。

・ 上手な人は失敗による挫折を乗り越えて大きく飛躍できる。

・ 下手な人は I。

【文章2】 ……誤りを言う人がいなかったら、学問なんて進まなかったろう。

正しいとわかっていることは討論の必要がない。 IIこそ討論に値する。

1 I 失敗をひたすら避ける II 正しいと考えられる意見

2 I 新しいことにチャレンジできる II 正しいか誤りかわからない意見

3 I 失敗で大きなダメージを受ける II ありふれている意見

4 I 成功のチャンスを逃がす II 誤っているかもしれない意見

(イ) Kさんは【文章1】と【文章2】を読んで考えたことを次のようにまとめた。【Kさんのまとめ】中の I〜IV に適することばを、あとの①〜④の条件を満たして書きなさい。

【Kさんのまとめ】

【文章1】には、失敗と上手に付き合えば、失敗を避けるよりも大きく飛躍できると述べられている。確かに、失敗を避けようとして何もチャレンジしないであれば、決して成功することもできない。失敗を避けることは成功を避けることにもなってしまうのだと感じた。

【文章2】には、学問を進展させたのは、正しい意見ではなく、誤った意見のほうだと述べられている。みんなが正しいことしか言わなければ、それに賛成して終わるだけで何も新しいことは生まれないので、たとえ誤りだとしても、とにかく言ってみるほうがよいのだとわかった。

行動すること、そこ

以上のことから、失敗は避けるより上手に付き合うほうがよく、
から学ぶことが成長や発展につながる大事な過程であるといえることがわかった。今後は、
をおそれず、積極的にチャレンジしていきたい。

① 書き出しの **失敗は避けるより上手に付き合うほうがよく、** という語句に続けて書き、文末の **行**

動ずること、そこから学ぶことが成長や発展につながる大事な過程であるといえることがわかった。 と

② 書き出しと文末の語句の間の文字数が十字以上二十字以内となるように書くこと。

③ 【文章1】と【文章2】の内容に触れていること。

④ 「失敗」「誤った意見」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

(問題は、これで終わりです。)